

理事長あいさつ



千田 彰一

(香川大学医学部附属病院総合診療部)

はじめに

日本超音波医学会は、1962年に第1回超音波医学研究会が開かれてから、2012年には50年目を迎えました。これまで本会節目の10年目ごとに記念大会が開催され、1981年には20周年記念大会で「超音波医学発達の歴史（収載：超音波医学 9, 1982）」が著され、25周年にも「超音波年表」（第50回研究発表会竹内久彌会長）が作成され、30周年記念として「超音波医学の発展をもたらした人達」（第60回研究発表会伊東紘一会長）が刊行されました。そして2002年に第75回学術集会長を務めた筆者が責任編集して創立40周年記念「超音波医学の先駆者たち－日本の黎明期を支えた人々－」を発刊しました。これは、1917年のP.Langevinによる超音波の生物学的作用の報告に始まり、1932年の超音波研究を端緒とする本邦での先駆的基礎研究から、主として我が国における超音波研究の黎明期を概観し、1970年代以前のコンタクトコンパウンドスキャン登場までにおける開発研究を記録したものであります。ここで活躍された先輩の多くは既に鬼籍に入られ、今はそのご苦勞を直接お聴きすることはかなわぬこととなってしまいました。刊行後、1970年代後半における電子スキャン登場後の爆発的な超音波医学発展の歴史を、できるだけ記憶が定かなうちに正確に記録にとどめるべきであるのご指摘を沢山いただきました。その渦中であつた筆者にしてみれば、その必要は身にしみて感じるものの、なかなか着手するには至りませんでした。2010年に第83回学術集会を主催された工藤正俊会長の企画になる「私と超音波」には、本会の名誉会員、功

労会員はじめ役員、代議員などがエッセイとして、各自の超音波研究の歴史が語られました。これらを受けて2012年の節目の折に、これまでの超音波医学の歴史に立って新たなる発展を目指すために50周年記念事業を行いたいとの理事会議論があり、そのいくつかの事業の一つとして記念誌を出版しようということになりました。以上の次第で、本書では電子スキャン登場後の超音波機器の開発歴史を縦糸に、各診療領域での超音波臨床研究の発展が述べられることとなったものです。この機に、日本超音波医学会自体の50年のあゆみを資料整理して、記録に留めることも実行されました。したがって本書は、役員、代議員をはじめ、多くの先輩をも煩わせたことから、資料の正確を期した読み物としての価値をも有していると自負するものです。限られた編者による記事ではなく、いわば多くの研究者による原稿のつなぎ合わせであるために、あるいは統一性、一貫性を欠くところご指摘を受けるかも知れませんが、血の通った生の声であることから、史的な意味合いの濃いもの

であるといえると思います。

故菊池喜充編集委員長は「超音波医学（初版）」の序に、超音波の医学応用には診断的応用と治療的応用の2大分野があると述べておられます。当初治療面での応用が先行しましたが、次いで診断的応用が爆発的に進歩し、先達の幾多の御努力により超音波診療は、多くの臨床領域でスクリーニングから専門的な領域まで広く各科で臨床適用が進んで、不可欠の検査診断手技と認識されるようになり、今や超音波検査なしでは臨床診断・治療が成り立たないほどの地位を得るに至っています。そして、新世紀になり超音波の治療面での応用が再び脚光を浴びようとしているかの気配があります。今後ますます、診断に治療に新たな研究が進んでいくと期待され、多くの若い人達が超音波とともに歩んでいくものと期待されます。

本書のなるにあたっては、谷口信行編集委員長をはじめ多くの委員方および本会事務局の諸氏の並々ならぬ努力の賜であると感謝を表します。